
令和3年

6月の普及活動状況

ダイジェスト版

～県下10農林事務所農業普及課と農業経営課(農業革新支援センター)の取組～



岐阜県農政部農業経営課

ぎふ農業・農村を支える人材育成

岐阜農林■スマート農業 広域アンテナでロボットコンバインを運用

瑞穂市の(農)巣南営農組合では、令和元年度からロボットコンバインを使用した水稻や小麦の収穫作業を行っている。これまでは移動基地局をほ場周辺に設置し刈取作業を行ってきたが、J A ぎふ合渡支店に広域アンテナが建設されたため、6月5日～7日、本アンテナを使用したロボットコンバインによる小麦の収穫を行った。

作業初日は農業普及課の他、J A ぎふ、農機メーカーが立会い、広域アンテナでも問題なく自動運転できること、移動基地局の設置・撤収が不要となり、省力になることが確認された。

今後、農業普及課では、広域アンテナを使用した時のロボットコンバインの作業時間を集計するとともに、本アンテナの利用拡大を推進していく。



【自動運転の様子】

揖斐農林■茶 スマート農業実演会の開催

6月24日に(農)美濃いび茶宮地生産組合のほ場において、「コンテナ式乗用型摘採機+トラックコンテナ」のスマート農業技術実演会が開催された。

コンテナ式乗用型摘採機は従来の袋取り方式の乗用摘採機と比べ、茶袋の取り換え作業がなくなり、摘採時間の大幅な短縮が可能となる。組合員は組合の未来を担うスマート農業技術を熱心に観察し、活発な意見交換を行った。農業普及課からは、先月行われた実証結果とその効果について情報提供を行った。



【スマート農業技術実演会】

中濃農林■スマート農業 直進&旋回アシスト田植機導入調査

スマート農業技術導入支援事業を活用し、関市武芸川町の農業法人がGPS機能付き直進&旋回アシスト8条田植機を導入した。この田植機は、基点を設定することでGPS機能により自動走行で田植えと旋回ができる。

農業普及課では、水稻田植え作業終盤の5月28日に、作業時間の調査と作業効率の聞き取りを行った。熟練者による作業であったが、作業負担が軽減できること、落水しなくても田植え作業ができることで田植え後の水管理の時間が短縮できるなどのメリットを確認した。

農業普及課では、効率的な水田農業経営に向けて、導入効果の調査を通じてスマート農業を推進していく。



【田植えの様子】

郡上農林■スマート農業 花きハウスに環境モニタリング機器を設置

高鷲地域にてユリやトルコギキョウなど切り花の生産を行う「ひるがのフラワーサークル」は、県の「農業DX化実証農場設置事業」を活用し、今年度からスマート農業機器による栽培技術の向上に取り組む。

6月21日、生産者が集まって各々のハウスに環境モニタリング機器を設置した。今回導入する装置はハウス内の温湿度や日射量、土壌水分量を計測するもので、データをスマートフォンでリアルタイムに確認し、生産者間で共有することもできる。

農業普及課では、得られたデータをもとに近年の夏季高温によって多発している生理障害への対策だけでなく、農家間の情報交換の活発化などの支援を行う。



【ハウスに機器を設置】

可茂農林■いちご新規就農者 富加町で育苗をスタート

「JA全農いちご新規就農者研修施設」にて14ヶ月にわたり高設栽培による最新技術を学んだ新規就農者が、富加町で栽培開始した。6月1日から育苗ハウスにおいて、9月の定植に向けて苗づくりを順調に進めている。

農林事務所では、地域の生産者との情報交換を図るため、生産者組織「可茂いちご生産組合協議会」の育苗研修会への参加や、近隣の若手生産者間での栽培データの共有を促し、地域の中で連携強化を図ってきた。就農地での栽培初年度の不安を解消し、当初に掲げた経営計画を実現し、早期に経営安定が図られるよう継続支援をしていく。



【新設育苗ハウス】

下呂農林■農福連携 トマト農家が管理作業を依頼

下呂市萩原町内のトマト農家3戸では、昨年度から市内の就労継続支援A型事業所に派遣を依頼している。管理作業の一部を障がい者の方に頼むことで農家自身の作業時間が確保されて、前年よりも出荷量が目に見えて増加した。

今年度は農家1戸が6月1日から管理作業を依頼しており、作業者は暑いハウスの中で熱心に作業を行っている。残る2戸は6月末以降に派遣を受ける予定である。また、今年度は市内のB型事業所と調整し、新たな障がい者の方が管理作業を担う取り組みを始めた。6月11日に3つのB型事業所と、トマト栽培管理への派遣の条件等について意見交換を行った。

農業経営に必要な補助労力がなかなか確保できない現状を、福祉事業所との連携により解決し、売上増加につながるよう、農業普及課では支援を継続する。



【ハウス内作業の様子】

飛騨農林■水稻 中山間地域における自動運転田植機の検討

6月8日、国府町の農業法人の水田において、無人仕様の自動運転田植機による実演会が実施された。これは外周を回ってマップ作成する作業は有人で行い、外周の植付作業は安全面から有人で行い、残りが自動運転となる。

近年、作業時間の短縮や負担軽減に役立つ各種スマート農業機械が登場してきており、水稻では、農業法人や大規模農家では、直線キープ田植機が導入されつつある。今回は耕地整備された比較的条件の良い、面積や水深の異なる3枚のほ場で、正確に移植ができることを確認した。

今後も農業普及課では、効率的な水田農業の展開に向けて、導入支援や効果検証を行いながら、スマート農業を推進していく。



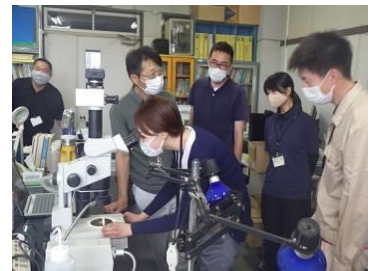
【正確に作業する無人田植機】

革新支援センター■普及指導員 若手職員を対象に基礎技術習得研修（病虫害）を実施

6月22日、勤務2年目の普及指導員を対象に、病虫害分野の基礎技術習得研修を実施した。今回の研修では薬剤抵抗性・耐病性の講義に加え、病虫害の診断手法について実技を中心に行った。

害虫では斑点米カメムシ類の識別方法を中心に、病害では各品目で発生の多い病害を中心に、診断のポイントや検鏡時の病原の特徴など、基礎的な顕微鏡の使用法も含めての研修となった。

今回の研修を受講した若手普及指導員には、研修で得た知識や技術を活かし、さらに病虫害診断スキルの向上を図ってほしい。



【病虫害診断の実習】

安心して身近な「ぎふの食」づくり

西濃農林■水稲 ジャンボタニシ対策実証ほの移植

近年、西濃管内においてジャンボタニシの被害が問題となっており、昨年は移植した水稲が皆無となるほ場も散見された。農林事務所では冬期に行う被害対策として、水路の泥上げやロータリー耕による殺貝を、春夏には水口網等の設置や田植え後の浅水管理、水田内・周辺での殺卵・捕殺を行うよう呼び掛けている。また、石灰窒素の施用や薬剤散布が有効であることから、本年は、J A広報誌等を通じて農業者へ情報提供するとともに、管内4か所の実証ほ場を設置し効果確認をすることとした。

養老町に設置した実証ほ場では、5月末に湛水状態で石灰窒素を散布し6月7日に代掻きを実施、6月11日に田植え作業と薬剤（メタアルデヒド粒剤）の散布を行った。

農林事務所では、移植1週間後と3週間後のジャンボタニシ生息状況や被害程度を調査するなど防除効果の確認を行い、次年度に向けて農業者へ情報提供する。



【実証ほの田植え】

ぎふ農畜水産物のブランド展開

東濃農林■アスパラガス・大湫機械化営農組合 アスパラガスの調査開始

東濃地域では、アスパラガスを地産地消の新品目として位置づけ、産地づくりに取り組んでいる。

土地利用型作物を主体とする農業法人が、昨年度からアスパラガスを補完作物として導入したため、今年度は土壤水分や生育調査を中心に支援を行っている。5月の長雨で水稲作業が遅れ、アスパラガスの収穫・管理作業の遅滞を懸念したが、今のところ順調に管理が行われている。

農林事務所ではこれからの猛暑に向け、特に灌水管理について支援していく。



【灌水の調査】

恵那農林■夏秋トマト・東美濃夏秋トマト生産協議会 3S研究会の研修会開催

東美濃夏秋トマト生産協議会技術部会の下部組織として3S研究会が発足しており、今年は21戸、183aで栽培が行われている。3S栽培は全体面積の1割を占めており、今後も拡大が見込まれる重要な栽培体系、スマート農業技術となっている。

しかし、経験年数が浅く、生産者個々の技術に差があることから、生産者の技術向上に資するため、6月10日に3S研究会主催による研修会が中山間農業研究所中津川支所で開かれた。農業普及課から、今後発生が懸念される病気の対策や、管理作業軽減に向けた新たな取り組みとしての2期作（収穫期を6月中旬～7月下旬、9月中旬～11月中旬に分ける作型）の事例紹介を行った。また、この研修会は毎月1回、定期的で開催していくことが決議された。

農業普及課では、今後も研究会活動を支援するとともに、生産者の技術習得に向けた支援を行っていく。



【研究会による研修会】

※苗をポットに1株ずつ植え、安価な装置で適切に養液を与えて育てるナス科果菜類隔離型少量培地耕システムのこと。土壤病害の発生リスクを低減できる。3Sは、Solanaceae（ナス科）、Separate（隔離型）、Small（少量）の頭文字。